

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270102637		
法人名	株式会社 アイ・エル・エス		
事業所名	グループホーム オランダ坂		
所在地	〒850-0963 長崎県長崎市十人町2番8号		
自己評価作成日	平成22年1月25日	評価結果市町村受理日	平成22年3月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

オランダ坂は、利用者の皆様が生まれ育った家とよく似たどこか懐かしさを感じる日本家屋で、土地柄、坂段の中にありますが、ちょうど中間のため、ホーム前は近隣の方々の寄り合いの場となっております。自治会や地域の方々グループホームをとても良く理解していただき、災害時の協力もお願いしています。地域の皆様があたたかく見守ってくださる中、安心して暮らすことができるグループホームです。

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://ngs-kaigo-kohyo.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本福祉医療評価支援機構		
所在地	〒855-0801 長崎県島原市高島2丁目7217 島原商工会議所1階		
訪問調査日	平成22年2月17日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

異国情緒豊かな長崎の中心地にあるグループホームオランダ坂は、全職員も事業所の経営に携わり、職員が夢をもって利用者のケアに生き生きと専念できるように、環境が十分に整えられている。利用者の一人一人にあった支援が継続できるように、日々利用者に寄り添い、利用者が大切にしていた事を忘れないように、職員が繰り返しやさしく語りかけを行っている為、利用者から自然と溢れ出る笑顔にも繋がっている。何か特別な行事を作らなくても、近隣の方からの協力、理解、見守りがあり、地域と密着した関係を築いており、代表者も“地域の方に運営して頂いている”と感謝の気持ちが強い。地域の方々が、ホームに気軽に立ち寄り、玄関先のベンチを利用して寛いでいる光景を日常の中で、目にすることができ、なだらかな階段がある道の途中にホームの建物があるお陰で、車の通りがなく、隅々まで掃除が行き届いた昔ながらの懐かしい建物のなかで、壁、照明、窓、全てを大切に、あらゆる物に感謝と慈しみを感じ取ることが出来る事業所である。

サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	当初から「住み慣れた地域で安心して暮らす事ができるよう支援します」という理念を掲げており、朝の申し送りの際に声に出して運営理念を読み、お互いが確認し合っている。	利用者の可能性を信じゆっくり待つ事、出来る事をできるだけしてもらい支援を常に心掛け、実践に努めている。職員全員が理念を共有し、管理者と職員が意見の統一を図り、同じ立場でケアに臨んでいる。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の一員として自治会に加入している。地域の防災訓練には積極的に参加し、協力体制を整えている。また、地域行事への声かけをしていたり、日常的にも挨拶を交わしたり、おすそ分けをするなど交流の機会が多い。	玄関前のベンチを近隣の方も利用され、小さい子供から大人まで、地域の方々との交流の場となっている。古いベンチを近所の方が手直ししてくださったり、お互いにお裾分けしたりと、自宅に居た頃と変わらないお付き合いをされるなど、地域の方の見守り、理解も得られている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今後の福祉の人材育成の貢献として、実習生を受け入れている。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議では、事業所からの報告だけでなく、自治会の活動や取り組みについても報告がある。参加メンバーから意見や質問が活発にあり、互いにサービスの向上に活かすことができている。	運営推進会議は二ヶ月に一度開催し、参加者から災害の種類によって避難場所を提案されるなど円滑な運営とサービスの質の向上に繋げている。会議の後は、利用者に面会する方も多く、楽しみの一つとして、輪が広がってきている。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所に対し、相談という形で連絡を取り合っている。	利用者の支援について、協力が得られるように、利用者の暮らしぶりを伝える良い機会となっている。介護計画の立案についても意見を求めることもある。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	勉強会等を通じ、身体拘束は行わないということを職員が全て理解し、実践している。	代表者が“雨が降るから外に行けない”“利用者が何かをしようとする事を止める”ことは身体拘束に当たる事を常々話しており、玄関には鍵をかけず、利用者が外出しそうな様子があれば、さりげなく声をかけたり、一緒について行く等の対応をしている。また、自治会を通して、地域の方への見守り、声かけをお願いしている。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待はあってはならないことと全職員が受け止め、虐待は絶対がない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、事例なし。成年後見制度等を活用されている方はいないが、機会があれば職員に説明を行っている。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	説明を行い、納得した上で署名捺印をお願いしている。疑問や心配事にも答え、理解、納得の上で同意を得ている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族とは何でも言ってもらえるような関係作りを心掛けている。家族から意見や要望があった場合は、早急にミーティングを開催して話し合い、反映させている。	家族が訪問した際には、職員の手作りのお菓子を一緒に食べながら利用者の状況を報告する等、何でも言って頂ける絶好の機会として受け止めて、雰囲気作りを工夫している。利用者との普段の会話、表情やしぐさから様々な事を読み取り、利用者が主体となるような運営に努めている。	
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のミーティングで意見を聞くだけではなく、日頃から職員一人ひとりと話をする機会を作っている。	昼食後の比較的落ち着いた時間を利用して、管理者も含め職員同士で活発に意見を出し合いケアの向上に取り組んでいる。代表者は、職員と壁を作らない信頼関係の構築に努め、管理者を始めとする全職員と日常の中での気づき等を共有しており、運営に活かされている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は頻繁に現場を訪れ、職員の職能を評価している。また、各々が働きやすい職場環境の整備に努めている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修への参加や、ホーム内の勉強会に参加できる機会を作っている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県のグループホーム連絡協議会に所属し、研修会等を通じて他事業所との意見交換をしながらサービスの向上を目指している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		<p>初期に築く本人との信頼関係</p> <p>サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている</p>	<p>入居前に必ず面談を行い、本人の状況を把握すると共に関係づくりに努めている。</p>		
16		<p>初期に築く家族等との信頼関係</p> <p>サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている</p>	<p>相談や見学の時点で、困っていること、不安なこと等の家族の状況を十分に聞き、受け止める努力をしている。</p>		
17		<p>初期対応の見極めと支援</p> <p>サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている</p>	<p>相談時に本人や家族の思いを聞き、必要なサービスが他にあれば居宅や地域包括支援センターにつなげている。</p>		
18		<p>本人と共に過ごし支えあう関係</p> <p>職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている</p>	<p>利用者、職員共に女性ばかりの中で、教わりながら料理や縫い物をしている。お互いが支え合い、日々の生活を過ごしている。</p>		
19		<p>本人を共に支えあう家族との関係</p> <p>職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている</p>	<p>家族の来訪時に情報交換を行い、本人を支えていくためにはどうしたら良いかを一緒に考えるようにしている。</p>		
20	(8)	<p>馴染みの人や場との関係継続の支援</p> <p>本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている</p>	<p>よく通っていたお風呂や馴染みの商店街へ出かけたり、毎年楽しみにしている祭りや行事にお連れしたりしている。</p>	<p>近所の銭湯や商店街にお連れする等、以前から大切にしてきた生活を職員も支援している。利用者のほとんどの方が地域住民であったので、地域の方が面会に来られ、継続的な関係に繋がっている。</p>	
21		<p>利用者同士の関係の支援</p> <p>利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている</p>	<p>利用者の仲の良し悪しを見極め、職員が間に入り会話の調整や雰囲気作りに努めている。利用者同士の支え合いの場面では、職員は側で見守るようにしている。</p>		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現時点では契約終了の方は、内科的病状の悪化により入院となったため、遊びに来ていただける状態ではないが、電話のやり取りをしている家族はいる。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話の中から本人の思いを把握したり、言葉にできない思いを表情等から感じ取るため、小さなことも見逃さないようにしている。	家族や関係者からも情報を得るように努めている。利用者のこれまで大切にしてきた事を思い起こせるように、歌がお好きな利用者には、職員と一緒に繰り返し歌を歌うなど、思いやりの心を持って接している。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に本人や家族から聞き取りをし、入所後も本人や家族、友人等の話から少しずつ把握するようにしている。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムを把握した上で、その日その時の状態に応じた支援ができるようにつとめている。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族の意向を聞きながら、ケアマネジャーと職員が話し合いの場を持っている。医療面では協力医の意見を聞くこともある。	ケアマネジャーを中心として利用者主体となるように、担当制にしている。職員全員が責任を持って計画に携わり、アイデア、気づきを共有できるように話し合いを重ねている。作成した計画は、利用者、家族に説明し同意を得ている。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人の記録に一日の身体状況、精神状況を記入している。また、個別記録を介護計画のモニタリングに活かしている。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	通院や緊急時の病院受診等、家族が対応できない状況にある場合は、職員が臨機応変に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	消防署の協力の下での火災訓練を行ったり、地域の民生委員や自治会、ボランティア団体と普段から連携を取っている。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医への受診や通院を希望される場合は、ご家族と話し合い、支援を行っている。基本的には家族に同行してもらっているが、場合によっては職員が代行するようにしている。また、協力医により、隔週の往診、緊急時の往診を行っている。	家族から安心という要望を頂き、二週間に一度、夜間も受診可能な地域の内科医の往診をお願いしている。利用者にとってのかかりつけ医となり、会えるのを楽しみの一つとしている。希望があれば、随時、かかりつけ医を継続し、家族の同行が不可能な時は職員が代行している。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	協力医療機関の看護師と日頃から相談しやすい関係を作り、医療面での助言をもらっている。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院関係者との連絡を密に取り、必要な情報を提供している。早期退院へ向けて職員が見舞い、家族と話し合いを行っている。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	主治医の判断により医療処置、行為を必要とし、ターミナルケアと判断された場合、グループホームでの介護ができないことを入所時に説明する。また、そうなった場合、病院への入院、退所となる事を理解してもらうようにしている。	本人と家族に事業所が対応できるケアについて、納得していただけるように説明を行っている。出来る限り、意向に沿うように本人、家族、事業所、主治医の相談を密にしながら確認し合い、取り組む心構えがある。	
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	実技勉強会を実施し、実際の場で対応できるようにしている。人手が少ない夜間は、緊急時すぐに駆けつけられる職員が近くにいる。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	運営推進会議を通じ、自治会、地域住民と共に消防署による火災訓練を受けている。また、地域の防災訓練に参加したり、ホームと地域とで一緒に訓練を行う等、協力体制ができています。	地域の方々が率先して「ホイサッサ」の実践形式で誘導までを行う等、協力体制を構築している。婦人防火クラブのバケツリレーにも参加している。玄関先に格納庫があり、職員全員が使用方法を習得している。	今後は、もしもの際に継続してケアが行えるように、緊急時持ち出し利用者ファイルを作成することを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの声かけ、対応は十分留意し、利用者の誇りやプライバシーを損ねた対応をしていないか、普段から職員同士で確認し合っている。	馴れ合いにならないように、言葉かけは穏やかにゆっくりと心掛けている。ホーム便りの写真掲載については、個人情報に配慮し、利用者一人一人がメインとなるよう写真の入れ替えを行ったり、他の利用者をぼかす工夫をしている。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員が何事も決めてしまうのではなく、本人の意見や希望を聞き、選べるようにしている。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ある程度の決まり事はあるが、本人がしたいことを思っている時には、管理者を含め職員同士で話し合い、実現につなげている。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の希望により美容院への送迎を行ったり、訪問してもらったりしている。外出や行事等、特別なおしゃれができるような機会も作っている。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の好みを聞いたり、食材選びに行きながらその日のメニューを決めている。食事の準備、片づけも一緒に行い、参加できない入居者には、味見をしてもらう等の工夫をしている。	利用者の中には、朝から自前の前掛けエプロンをして、身も心も引き締まった気分で生き生きとお手伝いをされる姿が見られた。一日の栄養バランスを考えながら利用者とのメニューを決め、買物や食事の準備から後片付けに至るまで、利用者ができることを職員と一緒にいき、生きがいに繋がっている。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事、水分の接種状況を毎日記録している。定期的に栄養士からアドバイスをもらい、一人ひとりの状態に合わせた食事が提供できるようにしている。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、入居者一人ひとりに合わせた口腔ケアを行っている。口腔ケアの重要性を職員が理解し、歯を磨くだけにとどまらず、歯茎のケアも心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を作成し、入居者一人ひとりの排泄パターンを把握した上で自立に向けたサポートをしている。また、誘導の際は周囲に気を配り、さりげない声かけを行っている。	利用者の様子から声かけを行ったり、時間を見計らって、尿意の有無に係わらず、さりげない誘導を行っている。おむつに頼らない支援に努めており、昼間は尿とりパットを利用して利用者の羞恥心にも配慮している。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	散歩やラジオ体操等の適度な運動をする機会を設け、できる限り自然排便ができるよう、水分摂取または食材の工夫をしている。また、入居前から下剤を服用し続けている方や、医師が必要と診断した場合は、医師に薬の種類や使用量、頻度を検討してもらった上で服用するようにしている。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の時間は会話を楽しめるコミュニケーションの場としている。入浴を拒否される方には、無理強いをせず、なぜ入りたくないのかを探り、本人が入りたいと思うまで待つようにしている。	利用者と家族から習慣や好みを聞きとり、相談しながら支援している。希望があれば臨機応変に対応している。失禁時など必要の際はシャワー使用が可能である。入浴の時間は、“職員を独り占めできる”と利用者の好きな時間になっており、本音を話される時でもあり、職員にとっても大切な時間となっている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は活動的に過ごせるよう努め、一人ひとりのその日に応じた支援を心がけている。眠れない方がいる時には、温かい飲み物を飲みながら話をしたり、暫く側で一緒に時間を過ごしたりして、安心できるよう工夫している。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋をファイルし、職員が薬の目的や副作用、用法、用量を把握できるようにしている。また、服薬チェック表を作成しており、本人に薬を手渡し、飲んだことを確認した職員が記名するようにしている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	料理や洗濯等の家事や裁縫、花の手入れ等、本人が楽しみを持ってできることをお願いしている。また、本人が望むことが叶えられるよう、家族と協力し合っている。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は本人の希望に合わせて、散歩や買物、ドライブ等に出かけている。一人ひとりの生活歴に応じて、馴染みの場所に出かけることもある。	利用者は事業所玄関前のベンチに座って、通りの方々と会話を楽しんでいる。四季を感じる事ができる近くの公園に散歩に出かけたり、長崎くんちや地元のくんち、ランタン祭などの行事に出かけるなど、利用者の希望の外出支援が行われている。一年を通して利用者が思い思いに作られた千羽鶴を、8月9日の原爆の日には職員と一緒に原爆公園に捧げに行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人及び家族と話し合い対応している。買物に行った際には本人が支払うようにし、小額ではあるが、手元にもっている方もいる。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	毎年、家族や友人宛に年賀状や暑中見舞い等を出せるよう支援している。電話の支援については家族と事前に話し合い、個別の対応をしている。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	穏やかに暮らせるよう、一人ひとりの状態に応じた配慮を行っている。玄関やリビングには季節の花を飾ったり、自室は本人が好む飾り付けをしている。	これまで利用者が住まいとされてきた家と変わらない落ち着いた和室を共用空間としている。利用者が居心地良く過ごして頂く為の配慮がなされ、テーブル、椅子、ソファ、ちゃぶ台それぞれが、家庭的な雰囲気に繋がっている。トイレの照明の豆電球の色がやさしく照らしてくれている。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	仲の良い利用者同士一緒にリビング、食堂の椅子に座って会話を楽しんだり、ホーム前のベンチで自由な時間を過ごしている。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのものや思い出のものを持ち込み、安心して暮らせる環境をつくっている。	家族の協力も頂きながら、自宅から使い慣れた物を持ち込んでいただき、安らぎを得るように取組んでいる。ほとんどの部屋が和室で、各部屋がふすまで仕切られており、人の気配を感じながら孤独感もなくプライバシーが守られている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	必要な場所に手すりを設置するなど、入居者の状態に応じてできる限りの工夫をしている。全てをフラットにするのではなく敷居等を活かし、身体機能の維持に努めている。		